

27年度版教科書つれづれ 21 「手で食べる、はしで食べる」(学校図書・小学4年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「手で食べる、はしで食べる」(森枝卓士)は、学校図書の小学4年(下)に収録されている説明文である。昨年度関わったある公立の小学校の公開授業研究会でこの教材が投げ込みで用いられていた。また今年関わっている別の小学校でも公開授業研究会で投げ込みで取り上げることが検討されている。

学校図書は、光村図書や東京書籍に比べて採用数は低いのだが、人気の教材といえるのではないだろうか。

題名からも分かるように、食事における文化の違いについて述べた文章である。23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)を比べてみると、変更箇所がいくつもある。そして、その変更は説明文のあり方を考えていく上で興味深い。以下に、変更点を示しながらその意味を考えていく。

まず、旧版が全体で16段落あったのに対して、新版は14段落になっている。新版の方が2段落少なくなっている。旧版では段落を分けていたものを合体させて一つの段落とした箇所が一つある。もう一つは、ある内容に関わる箇所をカットしたことで一段落減ったのである。それぞれの変更については、あとで詳しく触れるが、結果的に、新版の方は文字数が少なくなり、その代わりに写真の数が少し多くなっている。

次に、1段落の文章の変更である。旧版は、次のように述べていた。

おすしやおにぎりではないのに、ご飯を手で食べているインドや東南アジアの人たちを見て、初めはおどろきました。手がよごれることが、気にならないのだろうか。どうして、はしやスプーンを使わないのだろう。同じ米のご飯なのに、なぜ、手で食べるのだろう。

新版も書き出しは同じなのだが、旧版にあった「同じ米のご飯なのに、なぜ、手で食べるのだろう。」という最後の文がなくなっている。

2段落以降で、日本の米とインドの米の違いを説明し、食べ方の違いを説明している。私は旧版の文章を読んだ時に、1段落の最後の「同じ米のご飯なのに、なぜ、手で食べるのだろう。」が、この後の部分に対して問題提示になると読んでいた。だから新版を読んだ時に、あれ、問題提示の文がなくなっていると一瞬思った。しかし、よく考えてみると、そうではないことに気がついた。

どうして、はしやスプーンを使わないのだろう。

と

同じ米のご飯なのに、なぜ、手で食べるのだろう。

を比べてみる。ご飯を食べる時に「はしやスプーンを使わない」ことが、「手で食べる」ことなのである。つまり、旧版の1段落では、同じことを言い換えて述べていたのである。新版は、言い換えをなくした。したがって、1段落の最後の文をカットしたことで、内容上の変化はない。よりシンプルになったに過ぎない。

ただ、「同じ米のご飯なのに、なぜ、手で食べるのだろう。」という文をカットしたことについて

は、少々意地悪な見方も出来なくはない。やや脇道にそれるが述べてみよう。

問題となる箇所は、「同じ米のご飯」という表現である。「同じ」は、「米」に掛かるのか、それとも「ご飯」に掛かるのだろうか。「同じ米」なのか「同じご飯」なのか。2～3段落では、日本の米とインドの米の違いを述べている。ということは1段落で「同じ米」と言ってしまえば、後の段落との整合性がとれなくなる。ということは「同じご飯」と考えた方がよいということになる。

ただし、文章も時系列に従って読み、理解していくのであるから、後の箇所を読んでから、前に書いてある意味が理解できるというのでは、意味をなさない。「同じ米のご飯」という表現自体が曖昧でわかりにくい表現といえる。

そのような紛らわしい表現を、教科書に載せるべきではない。さらに言えば、「米のご飯」とはどういうことだろうか。「ご飯」を辞書で調べると「米を炊いたもの」と出てくる。「米のご飯」は、「頭が頭痛」というような二重の表現になっている。「同じご飯なのに～」と言えよよかったのである。

ただ、「同じご飯」でほんとうによいのかという疑問も出てくる。3段落に「日本のご飯はつまみやすいけれど、インドのご飯はつまみにくく、こぼれ落ちてしまいます」とある。つまり、「同じご飯」とも言えないことになる。

「同じ米のご飯なのに、なぜ、手で食べるのだろう。」という表現は、インドの人たちが食べているのも、日本人が食べているのも、ご飯という点では同じなのに、なぜインドの人たちは手で食べるのだろう」ということを述べているのではないか。わざとややこしく考えるからいけないのだ、と言った声が聞こえてきそうである。いちいちケチをつけて読むべきではない、「素直に」読めばよいのだという声である。

ただ、教科書の文章は基本的には子どもたちのお手本となるものと、一般には考えられている。少なくとも、形容詞の掛かり方や二重の表現などが簡単に指摘できるような文は、よい文とはいえない。そのことに気がついたから（あるいはクレームが有ったのかもしれないが）、この文のカットに踏み切ったのではないか。やや意地悪な見方であるが、そんなことも考えられる文である。

三つ目は、日本のご飯とインドのご飯の比較をしたところである。旧版の4～5段落を引用する。

4 日本のご飯はくっつきやすいので、はしで持ち上げて食べられます。はしだと、テーブルなどに置いた皿の上から口に運ぶよりも、茶わんについて持ち上げたほうが食べやすいのです。

5 一方、インドの細長い米でたいたご飯はくっつきにくいので、はしを使って食べるには不便です。指にもつきにくいので、手で食べます。手で食べるには、茶わんよりも皿が便利なのです。わたしたちもカレーライスやハヤシライスをスプーンで食べる時、皿を使います。皿のほうが食べやすい物もあるということです。

新版は、3段落まではほとんど同じなのだが、旧版の4～5段落が一緒になった4段落は次のようになっている。

4 日本のご飯はくっつきやすいので、はしで持ち上げて食べられます。一方、インドの細長い米でたいたご飯はくっつきにくいので、はしを使って食べるには不便です。

はじめに述べた一段落少なくなっているのはこの箇所に由来している。見て分かるように、茶わんや皿といったご飯を入れる器に関係する部分がすっぽりと新版ではカットされている。ご飯を茶

わんに入れるか、皿に入れるかは、はしを使って食べるか、手で食べるかに依っている。手で食べるからこそ、皿のほうが便利であり、はしを使うから茶わんに入れて食べるのである。つまり、茶わんや皿といったご飯を入れる器の問題は、どうしてはしで食べるか、どうして手で食べるかという問題の後に来ることである。言い換えれば、ここでの主要な問題は「どうして、はしやスプーンを使わないのだろう」ということであり、その問題からすれば、茶わんや皿の問題は脇道にそれた話題といえる。だから、新版ではその部分をカットしたと考えられる。

特に「わたしたちもカレーライスやハヤシライスをスプーンで食べる時、皿を使います。皿のほうが食べやすい物もあるということです。」という文は、この文章で述べようとする問題からすれば、明らかに脇道にそれたことである。茶わんと皿とどちらが食べやすいかではなく、「どうして、はしやスプーンを使わないのだろう」「なぜ、手で食べるのだろう」ということを述べようとしているのだから、その話題を絞った方が、読み手としてもわかりやすい。つまり、ここでのカットは、論の流れをわかりやすくしたといえる。

四つ目に、旧版の6段落、新版の5段落がほぼ同じことを述べているのに、述べる順序が違っていることも面白い問題といえる。旧版の6段落は次のようである。

また、インドの人たちは、食べる時、食べ物そのものの味に加えて、食べ物にさわった時の感覚もいっしょに楽しんでいるといいます。他人が一度使った道具よりも、きれいかどうか分かって自分の手のほうが清けつだと考えているのです。

新版5段落は次のようである。

また、インドの人たちは、他人が一度使った道具よりも、きれいかどうか分かって自分の手のほうが清けつだと考えているのです。さらに、食べる時、食べ物そのものの味に加えて、食べ物にさわった時の感覚もいっしょに楽しんでいるのです。

なぜ、順序を入れ変えたのだろうか。

A インドの人たちは、他人が一度使った道具よりも、きれいかどうか分かって自分の手のほうが清けつだと考えているのです。

と

B 食べる時、食べ物そのものの味に加えて、食べ物にさわった時の感覚もいっしょに楽しんでいるのです。

この二つの文を比べてみると、Aの方が手で食べることのより主要な理由であるといえる。Bは、手で食べることに伴う付加的な理由である。

旧版では、その順序を逆にしていたため、「他人が一度使った道具よりも、きれいかどうか分かって自分の手のほうが清けつだと考えているのです」という手で食べる理由が、少しかすんでしまっていた。新版は、4段落で「米の形とせいしつがちがう」による理由、5段落で「食に対する考え方のちがう」による理由とはっきりと述べ分けて、6段落でまとめている。新版の方が、わかりやすい書かれ方になったといえる。

五つ目は、旧版の8段落、新版の7段落にあたる箇所の変更である。旧版は、次のようになっていた。

それでは、道具を使って食べるという習慣は、どこでどのように生まれたのでしょうか。ここでは、はしを中心に見てみましょう。

新版は次のようになっている。

それでは、道具を使って食べるという習慣は、どこで生まれたのでしょうか。そしてはしは、どのように使われるようになったのでしょうか。

この箇所は、この文章の中の二つ目の問題提示に当たる箇所である。旧版の問題提示を書き換えるならば、「はしを使って食べるという習慣は、どこでどのように生まれたのでしょうか。」ということになる。この問題提示に対する答えは、はしを使う習慣が、どこでどのように生まれたかということになる。

確かに、旧版の9段落では、はしが中国で生まれたことを述べている。しかし、10段落以降では韓国・中国・ベトナム・モンゴル（注）のはしの形や使い方の違いを述べている。それは「はしを使う習慣が、どこでどのように生まれたか」という問題提示からすると、ややずれた答えになっている。

注・箸が用いられる国と漢字文化圏がほぼ重なっているのは興味深い問題だ。漢字も箸も中国で生まれている。

新版は「道具を使って食べるという習慣は、どこで生まれたのでしょうか」「はしは、どのように使われるようになったのでしょうか」と問題提示を二つに分けた。結果として、問題提示と答えの対応がよりはっきりしたといえる。

六つ目は旧版13段落、新版では12段落にあたるモンゴルのことを述べた文章の変更である。旧版は次のようであった。

また、家庭内でめいめいが自分せん用のはしを持っているのも日本だけで、他の国では「だれのはし」と決められていません。ただ、モンゴルでは、肉のかたまりを切り分けるナイフとはしがセットになっていて、一人ずつ持っています。

新版は次のようである。

また、日本のように家庭内でめいめいが自分せん用のはしを持っているのはめずらしいことです。日本の他には、モンゴルの人々が、肉のかたまりを切り分けるナイフとはしがセットになったものを、一人ずつ持っているくらいで、「だれのはし」と決められていないことが多いです。

内容的にはほぼ同じことのように見えるが、ここの変更も私は評価したい。旧版で、「家庭内でめいめいが自分せん用のはしを持っているのも日本だけ」と言い切ってしまうと、その後に述べているモンゴルのことと矛盾してしまう。モンゴルも一人ずつ自分のはしをもっているのだから、日本だけではないことになる。ここで述べたいのは、自分専用のはしを持つ習慣が、当たり前ではないことである。新版の方が、その点が明確に述べられている。

最後に、旧版の最後の二つの段落を新版では一つにまとめている。旧版では、次のようになっていた。

手で食べるか、はしで食べるか、また、どんなはしでどのようにして食べるかということは、その国の食べ物や生活の仕方のちがい、つまり「文化」のちがいからきています。

どのような方法で食べるかということは、それぞれの国の「文化」から生まれた人々のちえなのです。

それを新版では一つの段落にまとめている。

手で食べるか、はしで食べるか、また、どんなはしでどのようにして食べるかということは、そ

の国の食べ物や生活の仕方のちがい、つまり「文化」のちがいからきています。どのような方法で食べるかということは、それぞれの国の「文化」から生まれた人々のちえなのです。

この部分は、この「手で食べる、はしで食べる」全体の「おわり」に相当する箇所である。

手で食べるか、はしで食べるか、また、どんなはしでどのようにして食べるかということは、その国の食べ物や生活の仕方のちがい、つまり「文化」のちがいからきています。

この部分は、文章全体のまとめとなっている文である。「おわり」にふさわしい文といえる。では、その後の文はどうだろうか。

どのような方法で食べるかということは、それぞれの国の「文化」から生まれた人々のちえなのです。

小学校の説明文では、このような文が最後に置かれることがよくある。それが、一番最後に、しかも段落をかえて置かれると、ここにこそ筆者の述べたいことがあるのだといった読み取られ方がされてしまうことがある。この文章で一番筆者が言いたかったことは、「どのような方法で食べるかということは、それぞれの国の「文化」から生まれた人々のちえなのです。」だとされてしまうのである。

しかし、この文章は「手で食べる、はしで食べる」という題名にも示されているように、どうして手で食べるのか、またはしを使って食べるのかを米の形や性質、食に対する考え方の違いを通して述べていた。更には、はしの使い方や形の違いなども述べてきていた。その意味では、「手で食べるか、はしで食べるか、また、どんなはしでどのようにして食べるかということは、その国の食べ物や生活の仕方のちがい、つまり「文化」のちがいからきています。」こそがこの文章のまとめとしてはふさわしいのであり、「人々のちえ」云々はあくまでも付け足しとして考えなくてはならない。

説明的文章の読解においては、何よりもその文章における問題提示と照応させて読みとることが大事である。読み手が何を重要と考えるかではなく、文章が何を述べようとして書かれているか、言い換えれば問題提示がどうであり、それに対してどのように照応して述べているかという事こそが、読み取りの中心にならなくてはならない。

新版が二つの段落を一つにしたことで、「人々のちえ」云々の箇所が必要以上に強調されなくなったことを、私は評価したい。

「手で食べる、はしで食べる」について、23年度版と27年度版を比較してきたのだが、ここまで見えてきたように、27年度版はよりわかりやすく、文意がより鮮明に理解できるように変更されている。

ただし、一つ気になることがある。それは次回で。